施策 PICK UP 2

ここがポイント●政府の都市再生本部（本部長・小泉総理大臣）では、平成15年度から毎年度、「全国都市再生モデル調査」として、都市再生に向けた先導的な取り組みを全国の地方公共団体やNPOなどから募集、選定し、大都市から地方都市まで、全国で展開されている都市再生への取り組みを促進しています。

都市再生でまちに魅力と活力を

特色ある都市再生への取り組みが、全国各地で進んでいます。
今回は、それぞれにアイデアを駆使した3つの都市の取り組みの模様をレポートします。

運河沿いに遊歩道を整備して、人々が憩える水辺の空間を創出している（港区・芝浦地区）。

今年2月に、東京都品川区・天王洲地区の運河上にオープンした水上ラウンジ。都内では、水域での商業目的の利用を認める規制緩和の初適用となった。

「水の都・東京」の復活に向けて。

東京都**品川区・港区**など

江戸時代より運河は、物資輸送に欠かすことのできない水路として、江戸、そして東京の発展に重要な役割を果たしてきた。戦後の経済成長期においても、東京港の貨物量が急増するのにしたがい、港から内陸への輸送を担っていた運河の重要度はますます増した。

しかし近年、東京港に着いた貨物を陸域に運ぶ手段は、トラックなどの陸上輸送が主流になり、船による輸送量は低下。運河の利用は大幅に減少してしまった。このことは数字の上でも明らかだ。昭和46年のはしけによる港内移動貨物量が340万トンだったのに対し、平成13年にはわずか3万トンにまで落ち込んでいる。

東京都が進めている「運河ルネッサンス構想」は、こうした背景のもとに立ち上げられた。東京都港湾局港湾整備部の小林英樹さんは、同事業についてこう話している。

「運河ルネッサンス構想は、利用の低下した運河や、マンションやオフィスなどに利用形態が変化している周辺の土地などの水辺空間を、観光、景観、回遊性などを重視した魅力ある都市空間に再生する取り組みです。また、この取り組みは、地域の町内会や商店会、企業、NPOなどの団体が集まり、みんなで運河の活用方法や運河を利用したイベントなどについて話し合う地域協議会を設立するなど、あくまで地域主体の取り組みとして推進しています」。

こうした地域の取り組みに対して都は、水域占用許可を規制緩和したり、イベント開催時に運河沿いの遊歩道や防災船着き場を貸すといった形で運河再生に向けた事業を支援している。

すでに今年2月には、東京都品川区の天王洲（てんのうず）地区の運河上に、運河の美しい景観を生かした水上ラウンジが開業した。これは、通常、商業目的での利用が認められない水域での規制緩和を初適用したもの。早くもウォーターフロントの新たなスポットとして注目を集めている。また、港区の芝浦地区などにおいては、人々が水辺に親しみ憩えるような運河沿いの遊歩道が整備されている。

「世界的な水辺のまちとして知られるベニスやアムステルダムを見てもわかる通り、運河は観光資源として大きな魅力を持っています。これを生かして、観光都市・東京を、海外の方も含めたより多くの皆さんにアピールできるように、この事業を進めていきたいですね」と小林さん。

めざすはベニス、アムステルダム。運河ルネッサンス構想にこめられた夢は大きい。

ノコギリ屋根工場をアーティストたちの
工房として活用した「無郷館（むりんかん）」。
彫刻家、服飾デザイナー、版画家たちが
全国から集まっている。
写真は東京からやって来た
彫刻家の丸尾康弘さん。

ノコギリ屋根工場を利用してオープンした美容院。
歴史を感じさせるノスタルジックな外観と、
店内のおしゃれな雰囲気とのミスマッチが面白い。

織物工場として設計された「ノコギリ屋根工場」。ノコギリの刃のようなギザギザ屋根が連続して形成されており、明かり取りの窓がついた傾斜面は、採光を一定に保つため、すべて北側を向いている。

「ノコギリ屋根工場」を、アトリエ、博物館、美容院に。

群馬県桐生（きりゅう）市

古くから日本有数の織物のまち
として栄えてきた群馬県桐生
市。織物製造の現場としてこのまち
の繁栄を支えてきたのが、現在進めら
れている都市再生の“主役”である「ノ
コギリ屋根工場」だ。この工場は、その
名の通り、ノコギリの刃を空に向けた
ようなギザギザ屋根が連続して形成
されており、傾斜面はすべて北側を
向いているという特異な形体の建築
物である。織物工場としてこの形体
が採用されたのには合理的な理由が
ある。屋根をノコギリ状にすることに
より、製造機械の音が乱反射し、外
部に漏れる音を和らげるとともに、
北窓に明かり取りのガラス面を備え
ることで、織物の色を見る際、採光を
一定に保つことができるのである。

「私が子どもの頃は、まちを歩いて
いると、あちこちからリズミカルな機
音（おと）が聞こえたものですよ。最盛期に
は600棟以上の織物工場がありま
したからね」と話すのは、桐生商工会
議所総務課長の石原雄二さん。しか
し産業構造の変化で織物産業が全
国的に衰退するのに伴い、桐生市に
おいても、次第しだいにノコギリ屋根
工場は姿を消していった。それでも、
桐生市には今なお240棟ほどのノコ
ギリ屋根工場が残っており、これは全
国一の規模である。これらの工場を活
用することで、地域活性化を実現で
きないか…こんな発想から、桐生市の
都市再生への取り組みが始まった。石
原さんはこう話す。

「現存する240の工場のうち、約
半分は織物業をはじめとする製造の
現場として稼働しています。問題は
残り半分の工場をどう活用するかに
あるのです」。

そこで桐生商工会議所に事務所を
置くまちづくり団体「ファッションタウ
ン桐生推進協議会」では、「都市再生
調査専門委員会」を発足。ノコギリ
屋根工場を保存、再生させるため、多
角的な視点から活用スタイルを提案・
実践した。

「もともと工場だったからといって、
使ってもらう人を製造業者だけに限
定する必要はない」と協議会の北川
紘一郎運営委員長が話す通り、すで
にノコギリ屋根工場は、アーティスト
たちの工房や美容院、博物館などに
活用されている。特に「無鄰館（むりんかん）」とい
う工房には、彫刻家、服飾デザイナー、
版画家などのクリエーターたちが全
国から集まっており、ノコギリ屋根工
場活用による都市再生のシンボル的
な存在となっている。

「今後は、さらに多くの人にノコギリ
屋根工場を知ってもらい、さまざまな
アイデアでこれを生かしてほしいです
ね。また、貴重な産業遺産でもあるノ
コギリ屋根工場を見て回る観光のため
のモデルコースも整備していきたいと考
えています」と北川さんは話している。

かつて山頂でのろしを上げていたことに由来する
火の山の展望台から望む関門海峡。

唐戸地区には、往時の下関をしのばせるレトロな洋館が点在している。
写真は旧下関英国領事館。

北九州の食のプロも通うという卸売り市場「唐戸市場」。
一般の人も買い物が楽しめる。

レストランや土産物店など、多彩なショップが並ぶシーサイドモール「カモンワーフ」。ボードウォークからは、関門海峡が一望できる。写真左奥に見えるのが「海響館（市立しものせき水族館）」。

海峡の魅力を生かして、滞在型観光都市に。

山口県**下関市**

古から大陸への玄関口として栄え、幾度となく激動の歴史の舞台ともなった関門海峡。港町・下関の旅は、いつもこの海峡とともにあると言っていいだろう。

実際、下関市が掲げる都市再生のテーマも、「下関海峡パノラマ構想」というもの。関門海峡の美しい景観を生かしながら、魅力的な観光施設や歴史的建築物などを観光資源として、にぎわいとやすらぎのウォーターフロント空間を整備していこう、という取り組みだ。

JR下関駅から関門屈指のビュースポットの1つである「海峡ビューしものせき」までのおよそ8キロほどの海沿いの道には、さまざまな新施設が続々とオープンしている。例えば下関のランドマークとなっているコンベンション施設「海峡ゆめタワー」。地上153メートルという、西日本有数の高さを誇る展望タワーで、球体総ガラス張りの展望台から一望できる関門海峡の大パノラマは絶景だ。また、ウォーターフロント開発の中心である唐戸（からと）地区には、関門海峡と"ふく（下関では、ふぐをふくと呼ぶ）"をテーマとした大型水族館「海響館」や、新鮮な海の幸を格安で小売りしてくれる「唐戸市場」、一大飲食&ショッピング街「カモンワーフ」といった施設がすでにオープンしている。一方、ちょっと目を転じると、旧下関英国領事館や旧秋田商会ビルなど、いにしえの港町のにぎわいを彷彿（ほうふつ）とさせるレトロな建物を見ることもできる。まさに下関ならではのロケーションが、"海峡テーマパーク"と呼ぶにふさわしい独自の魅力的なウォーターフロント空間を形成しているのである。

こうした官民一体となった取り組みが功を奏し、下関市は年間約350万人の観光客を呼び込む観光都市となった。しかし「課題はまだまだあるんですよ」と下関市役所総合政策部長の野村宗成さんは話す。「確かに訪れる観光客は増えていますが、ほとんどの人が日帰り観光で、宿泊客は全体のわずか17%ほどと少ない。観光客にいかに長い時間、下関にいてもらえるかが当面の課題ですね。例えば、朝は唐戸市場で朝市の熱気を感じながら買い物を楽しんでもらい、昼は海響館を中心とした唐戸エリアで遊ぶ。夜になったら、港町の美しい夜景を堪能する、といった観光プランを確立すれば、必然的に宿泊するお客さんも増えてくると思うんです」。

こうした課題に対応すべく、市や地元企業では、観光者向けの周遊バスを運行させたり、対岸の北九州市との連携を深めるなどの対策を講じている。「宿泊率の目標？それはもちろん100%ですよ」と力強く話す野村さん。海峡のまち下関の、さらなる魅力の向上に期待したい。

撮影・相澤 正